

# アンケートを活用した吃音のある児童への教育実践（2）

ICFに基づいたアセスメントプログラムを用いて

○小林宏明

（金沢大学人間社会研究域学校教育系）

KEY WORDS: 吃音, 児童, 教育実践

（目的）筆者は、吃音を主訴に教育臨床相談に訪れた児童に対して実施した ICF に基づいたアセスメントプログラムによる教育実践において、困り感やニーズを捕捉するツールであるアンケートを継続的に活用し、アンケートが子どもの吃音の言語症状や困り感を簡便に把握する手段となると共に、子どもが自身の吃音の言語症状や吃音に対する認知・感情・態度の状態、吃音についての考えや思いを言語化する機会を提供することを示した。今回筆者は、吃音を主訴に教育臨床相談を訪れた児童2名に対して実施したICFに基づいたアセスメントプログラムによる教育実践において、アンケートを継続的に活用し、その意義や課題を検討したので報告する。

（対象児）吃音が主訴で教育臨床相談に訪れた児童2名（A児：小学4年生男児、B児：小学3年生男児）。

（方法）2016年度に実施した教育臨床相談（A児9回、B児4回）の際に実施したアンケート（表1）の回答及び、アンケート回答時に教育臨床を担当した筆者との会話を整理した。本研究の実施にあたっては、保護者に研究の主旨を説明した上で文書による承諾を得た。

表1 実施したアンケート

- 吃音の調子はどうか（吃音）
  - 吃音での失敗やイヤなことがあったか
  - 学校が楽しいか
  - むかつくことやイヤな気持ちになることはあるか
  - 落ち込むことや辛い気持ちになることはあるか
- 授業中の発表の時の調子（発表）
- 友達と遊んだり話したりする時の調子（友達）
- 日直当番や係活動の時の調子（当番）
- 習い事やおけいこ

※ 本研究では、○のついた項目を取り上げる

※ いずれも5件法で回答（1.悪い、2.少し悪い、3.普通、4.少し良い、5.良い）

（結果）表2にA児、表3にB児のアンケートの回答を示す。なお、今回は、吃音及び学校における発話・コミュニケーション活動（授業、友達、当番）の調子について報告する。A児は、1年間を通して、吃音の調子、学校における発話・コミュニケーション活動とも、4～5と良好な状態を維持した。筆者との会話においても、吃音は出ているが辛い、発表は大丈夫、調子が良い、などと話していた。しかし、筆者が学校の様子について詳しく尋ねると、アンケートの回答を低く変更したり、発話への不安を訴えたり

表2 A児

月	回答	筆者との会話
5月	吃音4 発表5 友達5 当番5	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 吃音は出るが辛くはない。</li> <li>● 発表は心配。</li> <li>● 発表が始めは5だったが、小林が「大丈夫?」と確認すると4に変更する。</li> </ul>
7月	吃音4 発表4 友達5 当番5	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 子どもと母親との評価にギャップが見られる（母親は吃音が重いと感じているが子どもは気にしていない）。</li> </ul>
11月	吃音4 発表4 友達5 当番5	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 吃音で困っているという発言は聞かれない。</li> <li>● はじめは、調子が良い、吃音が出たり困ることはない、と答えていたが、詳しく尋ねると、吃ることを気にしたり、発話への不安を訴えたりする。</li> </ul>
2月	吃音5 発表5 友達5 当番5	

表3 B児

月	回答	筆者との会話
4月	吃音3 発表3 友達4 当番2	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 相談日が日直当番で、朝のあいさつでつまつてうまく言えなかった。</li> <li>● 発表で吃音が出て、胸に力が入り、いやな気持ちになる。</li> </ul>
5月	吃音3 発表2 友達4 当番3	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 吃音は以前より治ってきた。</li> <li>● クラスメイトに笑われた。</li> <li>● 授業の発表で説明するのが大変。</li> </ul>
6月	吃音4 発表5 友達5 当番2	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 相談日が日直当番で、少し辛く、つまりもしたが、当番の言葉は言えた。</li> <li>● 友達から吃音について言われなくなった。</li> </ul>
7月	吃音5 発表4 友達4 当番3	<ul style="list-style-type: none"> <li>● つまった時、「間違えた」と思うが、あまり気にしない。</li> <li>● 自由研究の発表でつまってしまったが、他にもつまっている人はいたし、何も言われなかった。発表、質疑はきちんと出来た。</li> <li>● 母は日常はもっと吃音出ているが、本人は意識していないようだとお話。</li> </ul>
10月	吃音5 発表4 友達5 当番4	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 吃音が少なくなった。完全に0ではないが以前より楽になった。困ることはない。</li> </ul>
11月	吃音5 発表5 友達5 当番4	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 吃音になることはあるが、意識や心配はしていない。</li> </ul>
1月	吃音5 発表4 友達5 当番4	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 吃音の調子が良く、困っていることはない。</li> </ul>
2月	吃音5 発表5 友達5 当番4	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 吃音は出なくなった。</li> <li>● 当番は、朝少し緊張するが、段々と慣れてくる。話すのが大丈夫になってきた。</li> </ul>

することがあった。B児は、吃音の調子は、4、5月が3だったものの、その後は4～5と良好であった。また、発表と当番も、4～7月が2～3だったものの、その後は4～5と良好であった。筆者との会話においても、4～5月は、日直でうまくできなかった、クラスメイトに笑われた、発表で吃音が出ていやな気持ちになったなど、吃音への否定的な訴えがあったが、7月以降は、吃音になることはあるが意識や心配はしていない、当番は朝少し緊張するが段々と慣れてくるなど、吃音への肯定的なコメントが多くなった。

（考察）A児、B児とも吃音の言語症状は依然としてみられるにもかかわらず、A児は1年間を通して、B児は9月以降、アンケートの吃音及び発話・コミュニケーション活動の調子が4～5と良好な状態を維持した。また、A児は筆者が学校の様子について詳しく尋ねると、アンケートの評価を変更したり、発話への不安を訴えたりした。これらは、子どもが感じている吃音の困難さの程度が吃音の言語症状と必ずしも連動しないことや、子ども自ら意識して掘り下げないと自身の吃音の困難さを把握できない場合があることを示唆している。そこで、指導者は、ただアンケートをとるのではなく、アンケートの回答を元に、吃音の状態や子どもが感じている困り感について子どもと話し合うことで、子どもの言語症状や困難を的確に把握したり、子どもの吃音についての思いや考えの言語化を促したりする必要がある。

（文献）小林宏明（2013）学齢期吃音の指導・支援改訂版第2版 ICFに基づいたアセスメントプログラム、学苑社。

(KOBAYASHI Hiroaki)